

流木生まれの龍、被災の朝倉見守る 九大の彫刻家制作：日本経済新聞

流木生まれの龍、被災の朝倉見守る 九大の彫刻家制作

九州・沖縄

2018/9/1 9:40 [有料会員限定]

<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO34876280R00C18A9ACX000/>



列島各地で豪雨災害が相次ぐ中、厄介なのが流木だ。家屋を壊すだけでなく、救助や復旧活動も阻む。昨年の九州北部豪雨でも大量の流木が大きな被害をもたらした。だが、福岡県朝倉市の被災現場を目の当たりにした彫刻家は「木は本来、山も人も災害から守ってくれるもの」と信じ、流木から水の守り神を彫った。生まれ変わった流木はいま、朝倉の小学校で子供たちを見守る。

流木で作られた「朝倉龍」は子供たちに親しまれている（福岡県朝倉市の杷木小学校）

昨年7月5日に九州北部を襲った猛烈な雨。道路が寸断され孤立した朝倉市松末地区の住民は、震える夜を過ごした。

真っ暗闇の中、一瞬の稲光に浮かび上がったのは、迫り来る流木の波だった。「ゴ

ン、ゴン」という鈍い音が響く。流木が岩や家屋、他の流木とぶつかり合う不気味な轟音（ごうおん）だった。恐怖におびえ、眠りにつけない子供もいた――。

九州大芸術工学研究院の准教授、知足美加子さん（52）は豪雨発生直後、九大の「九州北部豪雨災害調査・復旧・復興支援団」のメンバーとして朝倉市に入った。その際に聞いた流木の話が、ずっと耳から離れないという。

丸太のようにはげた木々は町中を埋め尽くし、救助や復旧も阻んだ。支援団に同行していた杉岡製材所（同市）の杉岡世邦代表は「被災者は木を憎んでいる。木も被災したのだが……」と複雑な思いを吐露した。彫刻家でもある知足さんは「流木から芸術作品を作り、被災者の心が前を向くきっかけにできれば」と思うようになった。

そんなとき、朝倉市三奈木の流木集積所で見つけたのが、直径1メートル20センチ、樹齢132年というクスの大木だった。「木が『彫ってほしい』と言っているように思った」と知足さん。イメージは固めていた。水の守り神の「龍」だった。

いざ大木をチェーンソーで切り始めると、木から火花が飛び散った。「目割れ」と呼ばれる年輪に沿ってできる裂け目に、砂利が入り込んでいたからだ。「目割れは横から強い衝撃があった証拠。豪雨のすさまじさが木の中に残っていた」（知足さん）

半年かけて完成した龍は「朝倉龍」と名付けた。「朝倉を苦しめてしまった流木が、水の守り神に姿を変え、今度は朝倉を守ってくれるように」との願いを込めた。

朝倉龍は近隣4小学校が今春統合してできた杷木小に寄贈された。6年の江崎華留菜さん（11）は「流木が水の守り神になって来てくれてうれしい」。同じ6年の山下有勇真さん（11）も「この龍がいるからもう災害は起きないような気がする」と笑顔をみせた。龍の背に児童が乗って遊ぶなど、早くも親しまれている。

塚本成光校長（52）は「朝倉龍は子供や地域の防災意識の象徴」と話す。九州北部豪雨からは「ある程度予測ができる水害は初動が大事」という教訓を得た。杷木小は毎月5日を「防災の日」として、避難訓練や防災教育に取り組むプログラムを検討している。